書店でこの本を見かけて、題名が目に止まりました。

「ほどなく、お別れです」

寂しく、どこか不思議な響きを持つ言葉でした。葬儀の最期のお別れを想像しましたが、それでいて静かに時間が流れていくような穏やかな感じもして、ふと小学生の時に亡くした祖母の葬儀を思い出しました。

この小説は、葬儀社でアルバイトをしている美空と葬祭ディレクターの漆原が、様々な事情や感情を抱えた家族に、葬儀を通してグリーフケアを施していく物語です。病気の子供と別れた両親、自殺をした方の親族など、それぞれの気持ちに寄り添ってお別れを受け入れるサポートをします。

私が心に残ったのは、先天性の病気を抱え、入院生活の末に亡くなった比奈ちゃんの葬儀の話です。母親は、頭では理解していても、なかなか別れることができません。漆原は父親から、看病に疲れて泣いている母親に比奈

ちゃんが「泣かないで。比奈のブルちゃんあげるから」と、ぬいぐるみを渡した話を聞きました。そのぬいぐるみは棺に入れられる予定でしたが、葬儀で漆原はそのエピソードを披露し、両親に持っていてもらうことにしました。「今はまだ光が見えなくても、これからも比奈のことを思いながら、支え合って生きていこう」という父親の思いも伝えます。

母親がそれを受け入れたところで、漆原の「ほどなく、お別れです」が響きます。

これまで、葬儀は亡くなった人を送り出すためのものだと思っていました。しかし、この本を読み、葬儀はそれだけではなく、残された人たちが大切な人の死を受け入れ、その人との時間を心の中に残すための時間でもあると感じました。

私の祖母との別れの日の記憶は、様々な儀式を行ったことが強く残っています。遠方のいとこや叔父叔母が集まり、家族葬で祖母を送りました。その葬儀には、悲しさだけでは

ない温かい空気がありました。祖母を中心にして家族が集まり、食事や会話をすることが安心できる時間でもありました。

両親にその話をすると、それは、家族を愛した祖母が生前望んだ葬儀だったそうです。

祖母が亡くなったことや儀式だけでなく、祖母が私たちを愛し、たくさんの人から愛されていたことも覚えていたいと思いました。

そして、葬儀社の方々は、遺族の希望を聞きながら、細かなことまで準備をしてくれたそうです。お花が大好きだった祖母にたくさんのお花を供えて見送ったことを思い出しました。悲しみの中にいる家族に寄り添いながらこうしたいという思いを一つ一つ形にしてくれていたのだと知りました。

美空の両親は、昔亡くなった美空の姉の死と向き合うことを避けてきましたが、祖母の葬儀で美空から、祖母がずっと言えなかった思いを伝えたことで美空の姉の死を受け止めることができました。私は、生きているうちに

に思いを伝え合いたいと思いました。

葬儀は、亡くなった人のためだけに行われるものではありません。残された人が「ありがとう」と伝えたり、思い出を振り返ったりして、最後にその人と向き合うために必要なものなのだと気づきました。

ちょうどこの本を読んでいた頃、母方の祖父母の家に帰省をしていました。食事をしている時に、お墓やお仏壇、遺影のこと、そして「もしもの時はこうしてほしい」という話を、時には笑いながら、時には明るい雰囲気で話しました。以前の私は、こうした話題はできれば避けたいと思っていました。しかし、その時は、いつかむかえるお別れの準備をすることがとても大事なことで、貴重な時間だと感じました。

「ほどなく、お別れです」という言葉を最初は、火葬によって二度と会えなくなるまでの短い時間を指すものだと思っていました。

しかし、この作中から「死は永遠の別れではない」

、

なく、再び会うまでの「ほどなく」の時間なのかもしれない」と感じ、その意味はもっと広く、深いものだと気づきました。そうした視点は、悲しみを完全に消すものではありませんが、大切な人の死を受け入れるための「心の支え」になると思います。悲しみの中にあっても、人はやがて日常へ戻り、自分の人生を歩き出していきます。そのための「区切り」として大切な意味が含まれていると感じました。そう思うことで、別れは少しだけ違って見えます。悲しみの中にも温かさが残り、その記憶を抱えながら人はまた自分の人生を歩いていくのだと思います。

私は、これから誰かとの時間を過ごすとき、「いつかお別れが来る」ということを少しだけ意識してみたいです。そうすれば、何気ない会話や一緒に食事をする時間さえも、今までとは違って見えてくるかもしれません。

これからは、もっと祖父母に会いに行って、たくさん話をしたいです。